

令和4年12月19日(月)

東京都練馬区

■区の概要

●面積：48.08 km²

人口：738,358人

世帯数：385,070世帯

令和4年度一般会計予算：2912億4480万円



区章

練馬区は、東京都23区の北西部、都心に比較的近い位置にある。

面積は、48.08 km²で、23区では5番目の広さとなっている。

地形は、海拔約30～50m前後の武蔵野台地といわれる洪積地帯により形成され、西側が高く東側に行くにつれて低くなっているが、ほとんど高低差がなく、なだらかである。

地質は、上総層群と呼ばれる比較的固い第三紀層の上に武蔵野砂礫層が7～8mの厚さで重なり、その上を関東ローム層が7～10mの厚さで覆っていて、一般に支持力の強い地盤上にあるといわれている。

土地利用では、宅地が6割を超えている。

緑被率は22.6%で、平成28年度から1.5ポイント減少している。宅地や農地など私有地のみどりが多くを占めており、今後も減少が懸念される。

区が管理し、「憩いの森」・「街かどの森」として区民に開放している民間所有の樹林地は、現在45か所、約10.0haを開設している。

また、農地面積は約194haと23区で最大となっているが、相続時の税負担や後継者不足などにより平成4年の約488haから大きく減少した。

■視察内容「都市農業について」

訪問場所…大泉風のがっこう(白石農園)

1、白石農園の全容

- 経営 農地面積140アール すべて生産緑地(固定資産税、相続税が優遇される)
作業受託地60アール
- 労働力 家族6名が認定農業者となっている。パート3名、精神障害者1名、ボランティア(登録者は約100名)
- 農業体験農園 50アール
- 路地野菜生産 約125アール
- アスパラハウス 18アール(2019年より)
- トマト・葉物等ハウス 7アール
- 生産野菜の出荷先 スーパー5店舗と契約、農園での直接販売、JA直売所
収穫体験、併設レストラン・コンビニなどへ。

2、大泉風のがっこう 所在地 練馬区大泉一丁目54番地 施行者(事業者)白石好孝

- 農業体験農園で、全体で50アールあり、一区画の面積が30㎡で125組の利用者を受け入れている。平成9年から開設。
- 1区画年間5万円で、練馬区民は区からの助成があり38000円になっている。
- 利用者は、農家の指導により、種まき、苗の植え付けから収穫まで、1年を通じて農業を体験し、年間30種類の野菜を収穫する。種や苗、肥料や農薬、農機具等すべて農園で用意する。
- 経営のメリット 収入の安定と労力の軽減。農業のやりがいを感じる。農業理解の醸成。
農業経営の一部として認められている。
- 行政のメリット 自治体が自ら市民農園を運営するより安上がり。住民サービスが充実する。
- 利用者の年齢層も30代の親子から70代と幅広く、1年を終えた体験者がその後も継続するかケースが多い。継続は基本的には5年間可能としている。

3、レストラン「La 毛利」について。

- 平成21年から始めていて、今年で15年になる。
- 料理は農園で取れた野菜を使っている。経営は店主にお任せしている。

4、「NPO 法人 畑の教室」の活動

- 地域の子どもたちに農業体験を進める活動を行なっている。
2000人に畑に触れあってもらう。年3~4回 絵を画いたり、感想文を書いたりしている。

5、農業と福祉の連携

- 統合失調症、うつ病等の精神障害者の社会復帰訓練の受け入れをしている。
- 福祉作業所に除草等の農作業・アスパラの選別・包装・発送の作業の委託をしている。
作業所の利用者は、スーパーなどで、自分たちの作業したアスパラが並ぶと喜びとなり、作業にも意欲的になる。

6、都市農業について

- 都市農業は、農産物の生産によって、都市に暮らす人のいのちの糧を提供し、気候変動の緩和・適応のための重要な手段となる。都市の持続可能性を高め、多くの生き物のいのちを育てている。そして、人と人とをつなぎ、人と自然とのつながりを創る。
- 平成27年制定の「都市農業振興基本法」によって、都市計画の中に都市農業が位置づけられた。
- 練馬区は、23区中農地面積が一番多く、40%を占めている。
サッカー場 約280個分、農家数は、438戸 960人の方が農業に従事。

7、都市農業の課題とこれから

- 農地は減少しているが、減少は抑えられており、新しい魅力的な施策が生まれ、後継者は確実に育っている。
- 気候危機の問題からも、SAGSからも社会的なインフラになっている。
- 耕作が難しくなった場合の対策がある。援農➡貸借の円滑化が課題。
- 収穫体験ファーム（さつまいも堀り等）の推進
- 生産者は労力の低減ができ、地域住民は身近なレジャーになっている。
- 農地を生産緑地とすると、固定資産税、相続税が優遇されるので、農地を残してほしい。農地が少なければ、それに見合ったものができる。収穫体験ファームなどがいい。

8、練馬区（行政）と農家（JA）の連携で息づく都市農業

- 練馬区農業体験農園 18園
- 果樹あるファーム ブルーベリー、柿、みかん 約40園
- マルシェ（交流型直接販売）区役所、世界都市農業サミットがきっかけで広がる。6グループあり。
- 練馬大根育成事業（練馬大根引っこ抜き大会）
- 世界都市農業サミットの開催（2019年）
- 練馬区情報アプリ（とれたてねりま） 約1万4000ダウンロード
- （仮称）全国都市農業フェスティバルの開催（2023年）
- 練馬区は都市農業が生きるまちになっている。

9、所感

- 最初に、白石さんが意欲的に明るく語って下さったことが、とても印象的だった。
- 都市農業のことを私は、暗いイメージでとらえていた。多くの農家さんは、高齢化し、後継者がいなくて継続することが困難になっているのではと思っていた。そういう面も多少はあると思うが、視察をして、都市農業の捉え方が大きく変わった。
- 平成27年の「都市農業振興基本法」によって、都市計画の中に農業が位置づけられ、農家を支援する仕組みができたこと。
- 農業体験農園の営みは、農家にとってもメリットが多く、利用者もレジャーとして行う。人と人の繋がりができる。農業のすばらしさを広げ、持続性もある。
- 子どもたちへの農業体験は、農業や自然への教育が大事なことだと思った。
- 農福の連携、障害者と農業の関わりが良い効果がある事などを知った。杉並でも行っているが、より進んだ取り組みをしていることが印象に残った。

- 行政とJA農家さんが協力協働した取り組みとして、効果的になっていると思った。
- 世界都市農業サミットの開催や（仮称）全国都市農業フェスティバルの開催の取組があることも農家さんの意欲につながっているのだと思った。
- 農園内にレストランがあるのは、野菜の宣伝につながり、地域にとっても農業を理解し、認識することになり、いい効果になっていると思った。
- 農地を維持していくことに対して、環境のため、防災のためにも必要なことだと改めて感じた。
- 実り多い視察でした。ありがとうございました。

